

山部赤人卷八春雑歌四首の特質

木村

斌

はじめに

万葉集卷八の春雑歌には、赤人の四首構成の歌が載せられている。

山部宿祢赤人の歌四首

春の野にすみれ摘みにと来しわれそ野をなつかしみ一

夜寝にける（一四二四）

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめ

やも（一四二五）

わが背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の

降れば（一四二六）

明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は

降りつつ（一四二七）

四首がはたして写実的内容があるかについては、問題がある。一首ずつの鑑賞においては問題のない素材である菫、桜、梅、雪、若菜摘みであるが、取り合わせとして雪と桜は自然の景觀というよりも、人工的な景物でない限り、万葉集では眼前に展開したりする自然、或いは景物の組み合わせとして考えられない。即ち、梅は雪と組み合わせが常識であつても、まず雪景色に桜が配置されることはないのである。

そこでこの四首とその構成がどのような特質を持っているのかを、考察の対象とする。

一、「春の野に」の歌

四首の配列について、新編全集は、この歌が広瀬本や紀州本などの諸本で次の歌（一四二五）の後に書かれているとして、これが原本の順序であつた、とする。⁽¹⁾ ちなみに、

卷八、十において季節分類の意識で春に収められていても、梅から桜へという開花の順序に拘りはない。但し、梅と桜を一首中にうたうのは、万葉集中次の二首である。

梅の花咲きて散りなば桜花繼ぎて咲くべくなりにてあ
らずや（五・八二九 張氏福子）

鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時片設けぬ（十・
一八五四）

引用した歌には、梅花から桜花への時のずれがうたわれてるが、卷八・十の春雑歌において、一首ずつの歌の構成に関しては、古今集のような春の季節での推移に基づく構造がない。従って、積極的に歌の順序を変える必要がないのではないか。これまでの順序に従っても、構成の矛盾が赤人歌四首にはない。

さて、莖を摘む目的については、近代の代表的な注釈書では、次の如くである。窪田評釈は、莖摘みを衣を摺る染料（略解）とする。土屋私注・古典全集・新編全集は、莖摘みを食料のため（代匠記）とする。武田全註釈は、莖つみを花とする。沢瀉注釈は、莖を摘んで何の用途に当てると言うのではない、と判断しているし、井手全注・中西口

訳注は、花の美しさを愛でる、という理解である。同様に伊藤注は、花への愛好を関心においている、とする。

そこで考えたいのは、「摘む」の意味である。万葉から用例を探ると十九首が参考になる。十九首の用例では、食料とする植物を摘むことが圧倒的である。例えば花を摘む例としては、

① 梓弓引津の辺なる莫告藻の花 採むまでに逢はざらめ
やも莫告藻の花（七・一二七九）

② 秋さらば移しもせむとわが蒔きし韓藍の花を誰か採み
けむ（七・一三六二）

③ 外のみに見つつ恋ひなむ紅の末摘花の色に出でずとも
（十・一九九三）

④ 山傍には 桜花散り 貌鳥の 間なくしは鳴く 春の
野に 莖を摘むと 白妙の 袖折り反し 紅の 赤裳
裾引き 少女らは 思ひ乱れて 君待つと うら恋ひ
すなり 心ぐし いざ見に行かな 事はたなゆひ（十
七・三九七三・池主）

の四首が取り上げられる。

①寄物発思の歌では、莫告藻の花であつて、これは海藻であつて陸上の植物に類似する花が咲かない。花が咲かないのであるから、花を摘むことが出来ないであつて、これを永久に逢えることに結びつけて表現としている。「なおりそ」即ち、名前を言うなどの意味を配慮した類型的な発想であるが、形式的であつても花を摘む例ではある。また、②譬喩歌の花を摘む例は、花汁を染料とする鶏頭を女性に譬えて、女性をものにする意味とする。花を摘むのは女性をものにするようになるのであつて、鑑賞の為ではない。これらの用例からは、花を摘むことは、花に対する鑑賞に基づくことはなく、譬喩に用いたり、③一九九三番は、これも花を染料にする紅花を摘むという用例である。

次に④莖を摘む例とするのは、唯一大伴池主の作にある。池主の例では、明らかに赤人の歌を踏まえていて、女性が「莖を摘む」という。

そもそも摘むと言へば、万葉歌では山菜を摘むのが圧倒的である。さらに山菜であれば、摘む人とは一般論として女性である。これら四首中で「春の野に」の歌に対応するのは、一四二七番であり、ここでは「春菜つまむ」とある。「春の野に」の歌でも、これは明らかに莖摘むのは若菜という食料のためである。赤人の作であつても、歌で言うところの

ころの摘む人とは女性と考えて良いのであるまいか。また、第三句にある「われ」とは、女性を指しているのであらう。若菜摘みが女性の仕事であつたためであらうことからは、女性の立場で詠作している可能性が高い。岡田喜久男氏は、莖摘みを女性の仕事と判断している。次に「すみれ」を問題にしたい。莖は万葉集で四首に登場している。莖の例は赤人と大伴池主であり、既に引用した。残る二首は、巻八に収められている歌で、つば莖として花の咲き盛りであることがうたわれている。

山吹の咲きたる野辺のつばすみれこの春の雨に盛りなりけり（一四四四 高田女王）

茅花抜く浅茅が原のつばすみれいま盛りなりわが恋ふらくは（一四四九 田村大嬢）

の如くである。

まずこの二首の作者は、高田女王も坂上大嬢もほぼ同時代の人であらう。ともに「つばすみれ」とうたうことが共通する。歌の創作年次の古い順と言うことであれば、赤人の莖、そして二人の閨秀作家のつばすみれ、さらに天平年間の池主の莖と用例を並べられる。莖の種類は多くて、現

在のどの莖を指すのか不明であるが、花を対象とした時に
つば莖、春菜の対象の時には莖と表現されていたのであろ
うか。但し、新芽、茎、葉、花いずれを食したのであろう
か、莖の種類とともに問題は残る。

高田女王の歌は、山吹の季節に咲くつば莖が春雨にさそ
われて満開になっていることを発見したものである。田村
大嬢は相聞であり、女性が女性に対してお会いしたい気持
ちを盛りに咲くつば莖の如くであると言っている。種類の
相違で莖とつば莖と言ったとも考えられるかも知れないが、
明らかに赤人と池主の作は、莖を春菜として摘むとしても
解せられるが、女性の歌二首には、花の盛りに基づく表現
であって、それが紛れることはなさそうである。更に確認
したい歌語が「春の野に」である。ちなみに「春の野に」
とあるのは、ほとんどが初句に用いているが、赤人と既に
引用した池主（三九七三）を除き、

①春の野に鳴くや鶯懐けむとわが家の園に梅が花咲く
（五・八三七 志氏大道）

②春の野に霧り立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散
る（五・八三九 田氏真上）

③春の野にあさる鳩の妻恋に己があたりを人に知れつつ

（八・一四四六 家持）

④戯奴（変してわけと云ふ）がためわが手もすまに春の
野に抜ける茅花そ食して肥えませ（八・一四六〇 紀
女郎）

⑤春の野に心展べむと思ふどち来し今日の日は暮れずも
あらぬか（十・一八八二）

⑥春の野に霞たなびき咲く花のかくなるまでに逢はぬ君
かも（十・一九〇二）

⑦春の野に草食む駒の口やまず吾を思ふらむ家の児ろは
も（十四・三五三二）

⑧春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯鳴くも
（十九・四二九〇 家持）

等であって、赤人歌を踏まえたものは一首もない。

まず、⑧四二九〇は、春愁を主題にした家持の絶唱と言
われている。家持の例を除く時、春の野と言えば、たなび
く霞であり、立つ霧であり、鳴く鶯であり、草食む馬であ
る。まさしく春のうらかな野の光景が展開する。その中
で⑤一八八二番が注目される。これは、巻十の「野遊び」
と題する一首であるが、春の野とは「心展べむ」とあって、
心を解放するために遊びに来る場所としている。そこは野

遊びの対象である。卷十にある野遊びの歌四首、さらに「煙を詠める」と題する一八七九番を加えて考察する時、野遊びに羹までも作っていたことを知るし、梅を挿頭して集っている。その他として、「春の野の」とうたう一八九八番、三八〇二番、三九六九番も同様である。

このように見てきたとき、心を解放して女性が春の野で摘むのは、食料としての「春菜・若菜」である。明らかに池主は、赤人歌を踏襲しているのであるから、彼の判断は莖摘みを春菜摘みと理解していたことになり、食料として羹等にしたと考えられる。桜井満氏の説では、この四首を絶句の起承転結の手法に適った構成であるとして、第一首は食べ物としての莖を摘みを、第二首は春の景としての桜花を、第三首は一転して雪を、第四首は雪のため若菜摘みが出来なくなったことを、それぞれ詠んだとする。この理解では、第一首の莖は代匠記説の食用説になることも指摘する³⁾。

ちなみに第一首は特別に難解な言葉があるわけではないのに、意味が通じない箇所がある。それは、「野をなつかしみ一夜寝にける」という表現である。これは類似表現が無い。しかし、比較したい表現としては、「一夜のみ寝たりしからに」(九・一七五二)と「一晚寝たら風景が変わった言

う高橋虫麻呂の例、「一夜一日も安けくも無し」(十二・二九三六)と一日一夜安らかでないと言う例、「一夜の故に」(十八・四〇六九)と一夜で変わるのに、また「一晚先立つ故に」と言う能登乙美の例、加えて「一晚中安眠できない、一夜思い続けた、等が一般的な例である。また、歌垣であれば事情が異なるであろうが、野遊びであれば昼間に行われたであろうから、そのまま夜を過ごしそこで寝てしまうとは、尋常のことと思えない。

いささかに思ひて来しを多祜の浦に咲ける藤見て一夜
経ぬべし(十九・四二〇一 久米広縄)

引用歌が比較的に近い表現であるが、野宿について「べし」とあって、そうしたわけでなく、あくまで理想である。赤人は現実に野宿したのであるから、全くその意味で類型がない。とりわけ野宿することが珍しいと思えないが、しかし一夜眠られない、思い続けた、夜毎夢見ること等は、表現として万葉歌に登場しているが、「なつかし」いから「一晚野で寝てしまったというのは、恋のため眠られない、あるいは「一晚安眠できない等とは全く異質な内容がある。なつかしくは、心惹かれることをいうのであるが、ここ

では春の野を対象にいうのであるから、去りがたく此処に居たい気持なのである。とすれば春を謳歌する気持が一晩の野宿にまでなつたと言えそうである。春野の遊びの後、さらにその野に惹かれてゐるのである。此処に此の歌の根本があるのである。春を謳歌する、堪能するということではなく、中西進氏の言う「風狂」として理解するべきではなからうか。

二、「あしひきの」の歌

「あしひきの」の歌は、春の山桜を賛嘆する一首と理解される。また、この歌の背景としては、当然現在桜が咲いているが故に、その短命なのを嘆いていても、桜を賛美している歌である。近代の代表的な注釈書では、窪田評釈は、その盛りの短いことを思ひ、限らない憧れのころろといい、武田全註釈は、「あしひきの山桜花」について「桜花の美を描くに足るよい句だ」という。井手全注は、この歌は素材にも、また男の立場の歌であるという点においても、第三首目（一四二六・女の立場の歌）と対応する、と述べ、中西口訳注は、上に事実と反対の内容を仮定して、この疑問で結ぶ型は「紫のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも（二一 額田王）」などに共通する、という。

伊藤釈注は、恋は自然に対して用いてゐるとして、「高桜の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも（三七三 赤人）」を指摘する。

さて、桜をうたう歌は、万葉集に四十首ほどあるが、「山桜」としてうたうのは赤人と家持だけである。

あしひきの山桜花ひと目だに君とし見てば吾恋ひめやも（十七・三九七〇 家持）

類似する山の桜は

春雨のしくしく降るに高円の山の桜はいかにあるらむ（八・一四四〇 河辺東人）

とうたわれている。

第一首にある「春の野に」と言う言葉が「あしひきの」という枕詞と「やま」を導き出したのであろうか。赤人は、「春日野に登りて」（三・三七二題詞）として作歌している。野に登ると言うのであるから、野と山と共通するものがあるのであって、野から山へと自然に展開している、と言える。第一首目から第二首目の発想も自然の流れであつたの

である。植物と山とが結びつく言葉としては、山つばき（七・一二六二）、山たちばな（四・六六九、七・一三四〇、十一・二七六七、十九・四二二六、二十・四四七二）、山さなかつら（十・二二九六）、山すげ（十一・二四七七、二四五六、二八六二、十二・三〇六六）、山沢ゑぐ（十・二七六〇）、山桜と（十一・二六一七）、山すがのね（十二・三〇五一、三〇五三）、山したひかげ（十九・四二七八）等もある。

また、訓みの問題として、日を「ひ」か「け」かどちらかと言うことがある。「け」と読む方が古いのであろう。赤人はどちらとも決定できないのであろうが、一応「ひ」と読んでおきたい。

さらに歌語「恋」が赤人歌四十九首中四首に用いられたのであるが、赤人に相聞歌が一首もないこともあって、対象が人間ではなく自然に向けられていることになる。

①明日香河川淀さらず立つ霧の思ひ過ぐべき恋にあらなくに（三・三二五）

②高桜の三笠の山に鳴く鳥の止めば継がる恋もするかも（三・三七三）

③あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひめ

やも（八・一四二五）

④恋しければ形見にせむとわが屋戸に植ゑし藤波いま咲きにけり（八・一四七二）

「あしひきの」歌の本質は、山桜をうたっていることに関わる。桜と言えば、虫麻呂の長短二首（九・一七四七、一七四八）を思い出す。長歌では、上枝は散り、下枝はしばらく散らないようにと言いながら、

わが行は七日は過ぎし龍田彦ゆめ此の花を風になちらし（一七四八）

と反歌にはあって、花の賞味期限に七日を当てている。

ここで言う七日が実際の数概念で言っているのか、はた七日行く浜の真砂といった何日もと言う日々のかは、議論があるが、花見を配慮した時不思議な実感が込められている日数である。そもそも赤人は、事実反することを仮定として、それを強く否定することで桜花が短命であるから恋うるのである、というのである。さらに、評釈を踏まえて清水克彦氏は、「花期が短い故につる恋心を強調することによって、『山桜花』を賞賛している」とする⁵⁾。

まさしく桜の花を愛する一首である。

この歌は、「あしひきの山桜花」が前歌の「春の野にすみれつみにと」と対応して、さらに「日並べて……やも」という強い疑問の形式で結んでいて、前歌の「一夜」に対応する。さらに「恋ひ」が「なつかし」と対応していて、これら二首が一組として創作されたのは間違いないであろう。井手氏は既に引用した池主歌（三九七三）の「山びには 桜花散り……春の野に すみれつむと」という箇所を冒頭歌と第二首歌との影響であると指摘している。

そこでさらに考えてみたいのは、これら四首の前半である二首を男の立場の歌と考えることである。ちなみに清水氏は、第一首第二首を男性、第三首第四首を女性のそれぞれ立場で作られたとして、賞讃と嘆息をそれぞれ主題にする⁽⁶⁾と理解を示されている。ところが第一首目は第二首目と対応し、さらに第一首目は第四首目と対応している。葦摘むことは、春菜・若菜摘みである。とすれば男性の立場と云うことよりも、この前半も女性の立場からの創作ではないか。神亀から天平にかけて大伴旅人と藤原房前の書簡題詞を含む贈答（五・八一〇～八一二）において、女性仮託の立場で歌を作っていた。或いは赤人は、六首構成の歌群（二・三五七～三六二）で、女性に仮託した歌をよんでいる。

秋風の寒き朝明を佐農の岡越ゆらむ君に衣借さましを
(三二六二)

大伴家持は宴席において、女性に仮託している。仮託それ自体は、代作を含めて当然万葉以前からあるのであるが、女性に仮託することで親しみの気持を示しているのが、旅人・房前、さらに家持・池主などの贈答歌である。その家持が山桜をうたい、「君とし見てば」（一七・三九七〇）の君とは池主を言うのであるが、女性に仮託した立場で創作している。この歌も女性に仮託して作られているのであるまいか。

三、「わが背子に」の歌

窪田評釈は、「清純な、ある深みを持った歌で、赤人といふ人を思はせる」と述べ、土屋私注は、「ソレトモミエズなども常套的な誇張法」と厳しい評価を示す。岩波大系は、女の作か、と指摘する。現代の注釈書はいずれも女性仮託に触れている。

沢瀉注釈は、「わがせこは友をいふ」と略解にあるとし、古典全集は、わが背子を友人とする、といい、井手全注は、

女の歌として、「見せむと思ひし梅の花」「邸内に植えた花木の開花する時に合わせて、当時、親しい人を花見に招くならわしがあり、」とする。中西全訳注は、女の立場の歌という。新編全集は、男の友人にもちいたか、そして「雪降りには結果の残存を示し、現在雪が降りやんでいる状態にいう」という解釈も示す。

伊藤釈注は、「ここは女の立場になって用いたもの」と言う。現代の注釈書では、「わが背子に」が男性を指す言葉でありながら、女性の立場で歌が作られているのか、或いは男性の立場でも親しい男に呼びかけていったのが問題になっている。

万葉集では、「わが背子」は、百首近くの歌で用いられた歌語である。しかし、「見」を用いた歌としては次の例が参考になる。

- ①わが背子を相見しその日今日までにわが衣手は乾る時も無し（四・七〇三 巫部麻蘇娘子）
- ②わが背子が見らむ佐保道の青柳を手折りてだにも見むよしもがも（八・一四三二 坂上郎女）
- ③わが背子と二人見ませば幾許かこの降る雪の嬉しからまし（八・一六五八）

④わが背子が朝明の姿よく見ずて今日の間を恋ひ暮すかも（十二・二八四二）

⑤人言を繁みこちたみわが背子を目には見れども逢ふよしも無し（十二・二九三八）

⑥朝鳥早くな鳴きそわが背子が朝明の姿見れば悲しも（十二・三〇九五）

⑦天離る 鄙にはあれど わが背子を見つつし居れば思ひやる 事もありしを（十七・四〇〇八 池主）

以上の用例からは、作者が知られるものと知られないものがあり、知られるものでは⑦大伴池主がいる。池主の作を除く六例は女性の作であろう。また、「わが背子」が格助詞「に」と伴うときは、当然であろうが、「恋ひ」（九首）、「逢ふ」（二首）と結びつくのであって、赤人の「見」と結びつく表現は他に用例がない。「見」と結びつく時、格助詞が「が」（三例）、「を」（三例）、「と」（一例）と言うことである。また、見ることをうたつても、一緒に見たい、姿を見ても逢えない、姿だけでも見たい、とうたうのであるが、赤人は、わが背子に見せたいという願いをうたつたところに、この歌が万葉集で他に類型を見いだせない。

さらに男性であつても女性仮託の立場で歌を作っている歌人がいるが、その問題を考察する。

大伴旅人は、藤原房前に「梧桐の日本琴一面」を贈った。房前は、それに添えた書簡と歌に返歌したのが、次の巻五の歌である。旅人を我が背子と呼んでいる。

言問はぬ木にもありともわが背子が手馴れの御琴地に
置かめやも（五・八一二）

巻十七に記録されているが、時代は下り越中時代に家持とその周辺ではもつと積極的である。

わが背子が国へましなばほととぎす鳴かむ五月はさぶ
しけむかも（十七・三九九六 内蔵縄麻呂）
吾なしとな侘びわが背子ほととぎす鳴かむ五月は玉を
貫かさね（十七・三九九七 家持）

赤人の時代と言えば、神亀・天平初年を考えるのであるが、やはりある日突然大伴旅人に試みられ、さらに家持に受け継がれていくと言うよりも、歌には男女の仮託が記紀歌謡時代から存在している。ヤチホコ神の歌謡にしても、

或いは額田王の代作にしても男女の仮託を経ている。赤人やその当時の宮廷歌人はどうかであろうか。

そもそも赤人が女性に仮託していたとすれば、ほぼ同時期の宮廷歌人と呼称する笠金村にも、女性の仮託による創作が試みられている。宮廷歌人と言う言葉は、古代においてあつたわけではないが、吉野行幸に代表される行幸従駕などの場で創作した五位以下の歌人がその対象であろう。その意味では赤人も金村も宮廷歌人である。

梶川信行氏は、赤人の敏馬を過ぎる時に詠んだ長短二首（六・九四六、七）を女性に仮託した歌としている。また、女性に仮託することを、代作ということではなく、「座興」という歌の趣向として試みたとして、金村の紀伊国従駕歌（四・五四二～五四五）・入唐使に贈る歌（八・一四五三～一四五五）越路での望郷歌（九・一七八五、一七八六）をも指摘している。さらに、「吾背子に（一四二六）」を、明かな女性仮託の作として、「男性が「吾背子」とうたう例は家持にも見られ、後期万葉に特徴的な《遊び》の世界」という。

次に梅と雪との組み合わせについて考えたい。ちなみに「雪梅」はあるが、「雪桜」の組み合わせはない。梅は雪と強く結びついてうたわれる。さらに桜と梅の比較で対照的

なのは、桜や梅が何処に咲いているかと言うことである。

三笠の野辺（六・一〇四七）、糸鹿の山（七・一二二二）、高田（八・一四四〇）、島山（九・一七五一）に咲く桜であり、山や野で咲く桜をうたうものは、山桜の例を含めて十八首を数えるのに対して、山や野と対象を為す家や庭の桜を詠んでいるのは、「屋戸にある桜の花は」（八・一四五八）、わが屋前の桜（十・一八六九）とうたわれている二首に過ぎない。

そもそも梅は桜と対照的である。桜井満氏は、桜を「山の花」として、梅を「宿の花」として捉えている⁸。梅を多賀の山辺（十・一八五九）、岡傍（五・八三八、十・一八二〇）に咲くものとしている歌もある。また、春日野にある神社（十九・四二四一）に咲くともあるが、この場所は家や屋敷の範疇に入るであろう。万葉の梅は、まさしくほとんどが庭木である。家、屋戸、園、庭、御園生、春日野里、吾家、と言った言葉と結びつく場所に咲くのが梅である。とすればこの梅は春日野や三笠山、或いは春日山と言った場所にある梅とは考え難いことになる。

この事からは、この歌が梅の景を写實的に詠んだと言うよりも、雪を眼前にして梅を連想したのではないか。巻八には次の様な歌がある。

わが屋前の冬木の上に降る雪を梅の花かとうち見つるかも（一六四五 巨勢宿奈麻呂）

梅の花枝にか散ると見るとるまでに風に乱れて雪を降りく（一六四七 忌部黒麻呂）

また、巻十には興味深い問答歌がある。

山高み降り来る雪を梅の花散りかも来ると思ひつるかも（一八四二）

雪をおきて梅をな恋ひそあしひきの山片付きて家居せる君（一八四二）

春になつても山が高いと梅が咲かずに雪が降る。その降る雪を梅に見立てる風流心がある贈歌に対して、答歌は春だからと言って梅を期待して雪を残念に思うことを戒めている。

春になつてまず咲く花が梅であつたし、巻五の梅花の宴では梅見が行われていて、神龜天平の雅が窺われる。しかし、屋戸、庭、園といった場所での梅見はあつても、野における観梅はいまだなかつたようである。渡来した珍しい

植物であつて、まだ庭に植えられるのを常としていたのであろう。とすれば、ここで梅が詠まれていても、卷八等にある「……雪の歌」と題詞に記載される範疇に属する歌なのではないか。赤人の歌はあきらかに春の雪を主題にしている。

四、「明日よりは」の歌

この歌は万葉に類型的な表現を見いだしやすいのであるが、存外個性的な作品であり、古今集の世界にも近い。さて、窪田評釈は、神事関係の若菜摘みとして、「事に対しての焦燥感を具象化したもの……上の三首に較べて、性質を異にした歌」とする。武田全註釈は、女に関する比喩の歌と見ない方がよい、とする。岩波大系は、明日、昨日、今日と意識的な技巧、としているし、古典全集・新編全集は、「明日」とは、標をした翌日の意、という解釈を示す。古典集成は、「第三首と同じ女の立場からする嘆きと焦燥感が、『明日』『昨日』『今日』と重ね用いた中に表されている」とする。

まず、解釈の問題として、初句の「明日」とは、この歌をよむ日を基準にしていって言っているのか、標を結ぶ日を基準にと言つても、その点は根拠がないのであるま

いか。そこで「明日よりは」とうたう歌を考察するが、それらは次の如くである。

- ① うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む（二・一六五 大伯皇女）
- ② 明石潟潮干の道を明日よりは下咲ましけむ家近づけば（六・九四一 赤人）
- ③ 春日野に時雨ふる見ゆ明日よりは黄葉挿頭さむ高円の山（八・一五七一 藤原八束）
- ④ 慰めて今夜は寝なむ明日よりは恋ひかも行かむ此間ゆ別れなば（九・一七二八 石川卿）
- ⑤ 明日よりはわれは恋ひなむな名欲山石踏み平し君が越え去なば（九・一七七八 藤井連）
- ⑥ 年の恋今夜尽して明日よりは常の如くやわが恋ひ居らむ（十・二〇三七）
- ⑦ 明日よりはわが玉床をうち払ひ君と寝もねず独かも寝む（十・二〇五〇）
- ⑧ 雁がねの声聞くなへに明日よりは春日の山はもみち始めなむ（十・二一九五）
- ⑨ 明日よりは恋ひつつもあらむ今夜だに速く初夜より紐解け吾妹（十二・三一一九）

⑩ 悪木山木末ことごと明日よりは靡きてありこそ妹があたり見む (十二・三一五五)

⑪ 明日よりは印南の川の出でて去なば留れるわれは恋ひつつやあらむ (十二・三一九八)

⑫ 明日よりは繼ぎて聞えむほととぎす一夜の故に恋ひ渡るかも (十八・四〇六九 能登乙美)

⑬ 焼太刀を礪波の関に明日よりは守部遣り添へ君を留めむ (十八・四〇八五 家持)

これらからは、ほとんどが明日からは……する、した、とうたっているが、③ 明日から黄葉を簪にさす高円の山 (二五七二) や⑫ 明日からはいつも聞かれるだろう霍公鳥 (四〇六九)、と言う修飾語を形成するが例もある。赤人の例は、修飾句を作るのであり、直接歌の本旨に関わる述語に「明日よりは」は関わるものではない。その意味で藤原八束や能登乙美の歌が赤人の用例に近い。「明日よりは」とうたう意味については、渡辺護氏に興味深い考察がある。

「明日よりは」と言う一句が、単独の一首よりも、歌群で独特の効果を發揮することと、その歌群の最終部で極めて効果的な役割を果たすことである。⁹⁾しかし、赤人は、述部と直接関わない表現としている点に個性がある。

さらに赤人歌にある「昨日も今日も」或いは、その表現に近い「昨日今日」とうたう歌は、次の如くである。

① 東の滝の御門に伺候へど昨日も今日も召すことも無し (二・一八四 舎人)

② 愛しきやし榮えし君の座しせば昨日も今日も吾を召さましを (三・四五四 余明軍)

③ 前日も昨日も今日も見つれども明日さへ見まく欲しき君かも (六・一〇一四 橘文成)

④ 秋津野に朝ある雲の失せゆけば昨日も今日も亡き人思ほゆ (七・一四〇六)

⑤ 昨日今日君に逢はずする術のたどきを知らに哭のみしそ泣く (十五・三七七七 娘子)

⑥ 山の峽其処とも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れば (十七・三九二四 紀男梶)

⑦ 三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ (十八・四〇七九 家持)

その中では、③ 橘文成の歌が、一昨日、昨日、今日、さらに明日までうたわれているが、明日から何かが変わると言うのでなくて、明日もこれまでと同じだ、とうたっている。

て「明日よりは」とうたう歌と異なる。これを除けば、一昨日、昨日、今日をうたう紀男梶の例が目立つが、やはり今日まで雪で峪が見えないとうたっている。赤人の歌も、明日から春菜を摘もうとして標を付けた日が明日というのであるから、「明日よりは」と変わることを期待してうたう歌ではない。その意味では、昨日・今日とうたう歌と同質のものである。

赤人の歌を踏まえているのは、家持に見られる。四〇七九番がその例であるが、「雪は降りつつ」と言う句は、万葉で八例あるが、初出は相伴百代である。

梅の花散らくは何処しかすがにこの城の山に雪は降り
つつ（五・八二三 大伴百代）

そもそも「雪は降りつつ」といった句が類型的な表現でありながら、そこに個性が発揮されているのは、梅花の宴から山野での遊びにまで創造を広げる世界が開拓されていることである。第三首には梅が提示されていて、更に雪景色が拡がっていた。その庭木ともいふべき梅にも関わらず、さらに標野が提示されている。ここにあるのは、この第三首と第四首との構成にある空間の拡がりである。梅の咲く

近景を想像しつつ、桜や葦がはえている山野という遠景にパノラマが拡がっている。

古今集の一首で百人一首にも取られた、

君がため春野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつ
つ（光孝天皇）

をも連想する。

平安時代の初めには一月七日には、「若菜の節会」が行われていた。古事記にも若菜を摘みその年の豊饒を予祝している。光孝天皇御製と同様に、赤人の歌にも若菜の緑と雪の白さが交差している。早春の色鮮やかな色彩が際立つ一首である。白銀の世界だけではない色彩の対比にも配慮された歌なのである。そして、歌の主題とは、焦りと苛立ちを漂白したと言うことである。

五、四首構成について

古典全集は、「以上の四首は、赤人の代表的な作品といてよい。自然への沈潜が優美な形で詠まれている」として、さらに新編全集は、「以上の四首は、自然のなかに没入しきった赤人の歌境を示す代表的な作品」と述べる。伊

藤沢注は、「人麻呂も赤人も宮廷歌人である。その二人にまったく同様な短歌群四首が存するのは、人びとの集うところでは、かような風雅の作を公表するのが宮廷歌人の一つの努めであつたことを物語る」と語る。注釈書によつては、この四首の歌を纏まりある構成として理解する立場がある。例えば、井手全注は、「四首は全体として承前回帰型（波紋型対応）の構造」といい、伊藤沢注は巻四にある人麻呂歌、

柿本朝臣人麻呂の歌四首

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬかも（四九六）

古にありけむ人もわがごとか妹に恋ひつつ寝ねかてずけむ（四九七）

今のみの行事にはあらず古の人そまさりて哭にさへ泣きし（四九八）

百重にも来及かぬかもと思へかも君が使の見れど飽かざらむ（四九九）

を、赤人歌四首と類似すると指摘している。

さらに清水克彦氏は、四首が構造を持つ、とする。第一首目と第四首目、第二首目と第三首目の素材が対応してい

る。春の野の莖と野における春菜摘み、桜花と梅の花である。そして第一首第二首は、男性の立場から野や花に対する賞賛、また第三首第四首は、女性の立場から嘆息とした。賞賛と嘆息は、額田の春秋優劣を争った歌に類似する、とする。¹⁰さらに平館英子氏は、対比と構成ということで「見ゆ」対「見えず」、「春」対「雪」、「（山見）習俗」対「習俗（野遊び）」等を指摘する。さらに「聖なる時間」対「日常の時間」と「神話」対「異邦」との対照に触れ、二首ずつは、別時の創作かも知れない、とする。¹¹

ちなみにある個人が纏めた四首構成の歌群を取り上げると、次の如くである。

- ①人麻呂（二・四六）、四・四九六）
- ②人麻呂歌集（九・一七九六）、十二・三二二七）
- ③弓削皇子（二・一一九）
- ④角麻呂（三・二九二）
- ⑤河辺宮人（三・四三四）
- ⑥大伴百代（四・五五九）
- ⑦坂上大嬢（四・五八一）
- ⑧田村大嬢（四・七五六）
- ⑨追和梅歌（五・八四九）
- ⑩書殿餞酒日倭歌（五・八七六）
- ⑪赤人（八・一四二四）
- ⑫家持（八・一五六六）
- ⑬田辺福麻呂（十八・四〇三二）
- ⑭大伴池主（十八・四二二八）

以上の用例から、明確に途中から創作の立場が女性から

男性に、或いは逆に男性から女性にかえてゐる例は、人麻呂の引用した例以外見いだしたい。人麻呂は明らかに第二首目で「妹」といって男性の立場から女性をさして言っているのであるが、第四首目は、「君の使」とは男性の使いを指してゐて女性の立場からうたつてゐる。赤人歌は、前半の二首と後半の二首が男から女へ、女から男への展開があるであろうか、といえは否定せざるを得ない。というのは、すみれ摘むという第一首は、女性的なものであることは既に述べた。その問いに答えたのがあしひきの歌であるが、これも女性仮託の立場で作られてゐる、と考えて良いのではないか。一方、我が背子にに應えたのが明日よりはの歌である。この歌も女性仮託と考えて良い。

即ち、この四首の構成は、贈答二首の組み合わせで基本を考えるべきであるが、男女の贈答ではなく、女性同士、或いは女性に仮託した立場での贈答なのである。伊藤氏の指摘した人麻呂の四首歌とは、類似するが、明らかに人麻呂は基本的に男性の発想である。第三首目が女性作となつていても、他の三首は男性である。赤人は、万葉集の人麻呂以外の四首構成歌に共通する男から女、或いは女から男の立場で歌を詠むという展開を試みてゐない例と同じである。

赤人四首は、春の若菜摘みと女性仮託が共通するが、

箇々の作品は徹底的に対照的である。第一首と第二首が対照的であり、なおかつ第三首と第四首が対照的である。また、第一首と第二首の二首一組が、第三首と第四首の二首一組に対して対照的である。若菜摘みと言つても桜の咲く三月の野遊びと若菜の節会とも言ふべき正月の野遊びとがさらに対照的に対応している。うらかな萌葱の美しい弥生の光景に対して、新春とはいひながら白銀が展開する景物がそこにはある。

ここにあるのは、前半二首が春の謳歌が基本だとすれば、後半二首に見られるのは、嘆きが根本と云ふことであろう。野遊びと花見の行楽に対する雪見の景観とは、現実の事と言うよりも知性が生み出した想像上の構図である。たまたま雪が降つた、或いは事実と異なる仮定をして桜が開花の短いことを慕うのは、知性の働きである。或いは、雪が降つていながら野遊びや、花見をうたうのも宴席での機知的な世界であろう。この四首の世界とは、赤人が試みた女性に仮託して描いた桜満開の野遊びと白銀の世界が展開した野遊びを描いてゐるのである。しかも、この四首は、春を時間的にも空間的にも立体的に表現を試みてゐて、さらに謳歌と嗟嘆をもうたつたのである。

そこでさらに考えたいのが、中西進氏の言う「風狂」と

言うことである。⁽¹²⁾ この風狂とは、風雅に徹することである。例えば旅人が参考になる。

旅人は大宰府の長官、即ち帥であった時に梅花の雅な宴を催している。その様子は、天を蓋とし、地を座とし、人々は膝を交じえて酒杯を酌み交わしていると言ひ、「淡然と自ら放にし、快然と自ら足る」というのである。さらに、旅人は讃酒歌で、

この世にし楽しくあらば来む生には虫に鳥にもわれは
なりなむ (三・三四八)

とも述べていて、大宰府という都から遠く離れた場所であることも影響しているのであろうが、一般で言う貴族としての雅を遙かに越えてたものである。ここにあるのは、藤原麻呂が懷風藻で風月を情として、魚と鳥を翫とするという態度と等しい。

さらに藤原房前に「梧桐の日本琴一面」を贈っていて、そこには文章を添えている。中西進氏は、中国の康作「琴の賦」を真似た文章を房前に示して、旅人が遁世の士が梧桐の下に遊び、政界に置ける野望を棄てていることを示している、とした。⁽¹³⁾ さらに、天平二年における梅花の宴も、

趣味的な行事ではなく、王羲之らが蘭亭での集まりに共鳴したものである。しかも、旅人は中国に「落梅の篇を紀す」ともあって、盛りの花よりも散る梅に興味があった。梅花の宴での旅人は、

わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るか
も (五・八二二)

と、うたっている。

この歌は、落梅ということであらうに懷風藻の旅人詩の「梅雪残岸に乱れ 煙霞早春に接ぐ」とほぼ同じである。

ここに至れば、赤人の春の野遊びにおける菫摘み、桜のはかなさ、さらに観梅における雪、こららの組み合わせは、旅人が示した生き方に結びつくのであるまいか。

まずこの四首は、眼前に景観にとらわれずによんでいると考えられる。即ち、七賢人がそうであったように、悠然と世俗を離れて春に遊ぶことが主題になっているのである。梅が、桜が、等と言った季節の推移などは問題にならない。あるのは、凄まじいまでの風流な心である。春の心は、乱れに乱れているのである。野遊びは野宿に、花見は恋心に、観梅は雪見に、若菜摘みは延期になって、それぞれ質が変

わるざるを得ないのである。謳歌や嘆きは、現実の感情と
言うよりも、彼の風流心に由来している。それは、風狂と
いう性質のものも含む四首である。

結 び

この四首を簡単に整理すれば次の如くなる。また、四
首に共通する項目は、春の野遊びで女性に仮託した立場で
歌を作っていることである。

第一首	弥生	野	春菜(董)	風狂	緑と紫
第二首	弥生	山	桜	賞讃	桜色
第三首	正月	庭	梅	嘆息	白
第四首	正月	標野	春菜	焦燥	白と緑

平館英子氏も対比と言うことで詳細に分析して指摘して
いるが、⁽¹⁴⁾これほどの対照的な配慮が為されているのである
から、これら四首が最初からある主題とも言うべき同一の
歌作の場で作られたのではないか。これら四首の起源とし
ての創作とは、最初から四首構成であった、と考えたい。

即ち、この赤人四首は、連作体の詠歌である。対句的な
発想と対照的な内容で四首に纏められているのは、同一主

題があつて構成されているからであるが、そのためには最
初から四首で構成されるという意図で創作されているから
である。偶々春の野遊びの歌を四首纏めたという事ではな
いであろう。赤人は、四首構成のために徹底的に対照の歌
を創作していたのである。春という範疇、野遊びと言う行
楽、女性に仮託、それらを踏まえて一首一首が作られ、さ
らに構成されているのである。

桜が咲く頃の野遊びの場と、雪景色が拡がる梅見の頃の
場との違いがこれら四首の歌の背景に考えられても良い。
前半の場は、董や花見と言う歌の背景であつて、後半の雪
見と観梅という背景には同一の場での創作に思えないが、
しかし敢えて時間も空間も春の範疇いっぱいには拡大させて
いるのである。万葉集には直接「さくら(花)」をうたう
ものが四十首程あるが、花は弥生三月である。高橋虫麻呂
の作には、「春三月に、諸の卿大夫の難波に下りし時の歌」
(九・一七四七―一七五〇)とあつて、神亀三年か天平六年
かはつきりしないが、三月と明示している。

また、大宰府で行われた梅花の宴は正月十三日であつて、
その時には白梅が咲き乱れていたようである。この梅花の
宴では、「正月立ち春来らば」(八一五 大式紀卿)咲く花
としての梅、「春さればまづ咲く」(八一八 憶良)花とし

ての梅があり、雪・鶯と併せ詠む歌があるが、雪月花として梅が登場するのは、天平勝宝元年十二月に大伴家持の作（十八・四一三四）を嚆矢とする。

桜と梅とを梅花宴の折にはうたう例があつても、それは偶々梅を見ていて次に咲く花として桜を示しているに過ぎない。赤人の歌は、四首が同じ場、乃至はほぼ同じ時という創作であれば、形式的に梅と桜と重をうたつたものになる。たちつば重などは重よりも花の咲く時期が長く、正月から三月までの春であればいつでも咲いているいるのかも知れない。梅も花期が比較的長く、桜と重ならないと断定的に言えないが、基本は初春から中春であらう。桜は晩春に咲くものである。また、四首の前半二首が謳歌とすれば、後半の二首は嗟嘆であつて、この対照も春のもつ魅力であらう。額田王がうらめしいが故に心惹かれたという秋の季節の魅力を、赤人は春でも表現したことになる。

一体菫、桜、梅、雪、春菜の組み合わせは、机上の創作とも言うべき理知的なものであつて、現実には即したものはあり得ない。一首一首は、それぞれ赤人の創造する原風景のようなものがあつたにせよ、それを総合して春という持続的な時間と空間をパノラマに見せたのである。その春に対する思い入れには、風狂と呼ぶべき性格をも示し

ているのは、注目される。

《注》

(1)

現代の注釈書を略称によって引用したが、書名と著者は次の通りであり、以後の引用については、注を省略した。

土屋私注 土屋文明著 『万葉集私注』四 筑摩書房 昭和五十一年版

窪田評釈 窪田空穂著 『万葉集評釈』四 東京堂出版 昭和五十九年版

岩波大系 『古典文学大系万葉集』二 岩波書店 昭和三十四年

沢瀉注釈 沢瀉久孝著 『万葉集注釈』八 中央公論社 昭和三十六年

武田祐吉著 『増訂万葉集全註釈』七 角川書店 昭和三十七年

古典全集 『古典文学全集万葉集』二 小学館 昭和四十七年

古典集成 『新潮古典集成万葉集』二 新潮社 昭和五十三

年 中西口訳注 中西進著 『万葉集全訳注文付』講談社

昭和五十九年

井手全注 井手至著 『万葉集全注』八 有斐閣 平成五年

新編全集 『新編古典文学全集万葉集』二 小学館 平成七年

伊藤积注 伊藤博著 『万葉集积注』四 集英社 平成八年

(2) 「山部赤人論(二)——「赤人の歌四首」について——」

〔梅光女学院大学日本文学研究〕第十六号)

(3) 『万葉の花』「春の花」 九十頁。

(4) 『古典と日本人』 古典は語りかける」『古典と日本人』一四二～一四三頁。

(5) 「赤人の春雑歌四首について」〔万葉〕第九十四卷)

(6) 注5に同じ。

(7) 『万葉史の論山部赤人』「赤人の《芸》——『過敏馬浦時』の場合——」 四三八頁。

(8) 注3に同書 「山の花と宿の花」 十九～二十一頁。

(9) 「明日よりは」とうたう意味」〔万葉〕第四百十号)

(10) 注5に同じ。

(11) 「山部宿祢赤人の歌四首——対比と構成——」〔上代文学の諸相〕所収)

(12) 注4に同じ。

(13) 『万葉と海彼』「文人歌の試み——大伴旅人における和歌——」 六十六頁。

(14) 注10に同じ。